

3 CTで捻転部位が描出された胆嚢捻転症の1例

海津 元樹*・佐藤 敏輝(長岡中央総合病院)
 塚田 博・根本 健夫(放射線科)
 大竹 雅広・坂田 純(同 外科)
 五十嵐俊彦(新潟県厚生連病理
 センター病理)
 金井 朋行(金井医院)
 (*現 新潟県立がんセンター新潟病院放射線科)

胆嚢捻転症は、先天的な肝床部と胆嚢との付着不全による浮遊胆嚢の状態に外的な誘因が加わり、頸部で胆嚢が捻転する比較的希な疾患である。その特異的な病態から手術所見による診断は容易であるが、術前診断は困難であり、急性胆嚢炎と誤診されることが多く、その正診率は約20%程度である。

今回我々は、CTで胆嚢捻転頸部が描出され、この特徴的な所見により、胆嚢捻転症の術前診断が可能であった症例を経験した。

症例は70歳の女性。下腹部痛を主訴に近医から急性虫垂炎の疑いにて当院受診。腹部超音波では、下腹部に結石を伴った嚢胞性病変を認め、卵巣嚢腫の捻転を疑った。同日施行の腹部CT検査では肝胆嚢窩に胆嚢が描出されておらず、同部位より尾側からみて時計方向へ捻れる渦巻き状の構造が、この病変の頭側に連続して描出されたため、胆嚢捻転症と診断した。CTがこの疾患の有力な診断根拠となりえたのでここに報告した。

4 呼吸器疾患に合併した腹腔内 free air

斎藤 友雄・奥泉 謙
 前田 春男・黒川 茂樹(新潟市民病院)
 横山 道夫(放射線科)
 原口通比古(同 内科)
 鳥越 司(新潟大学医学部)
 6年生

0歳女(低出生体重児, RDS, 人工呼吸, 気胸, 縦隔・皮下気腫), 80歳女(気管支喘息), 77歳男(慢性肺気腫)の3例を提示し、呼吸器疾患に気腹を合併する理由を考察した。ラットに挿管し高圧をかけると気胸を起こすが、これが後腹膜腔に移行し、腹膜が破裂することで気腹を起こすことが実験的に確かめられている。一方、気胸・気縦隔

を伴わない特発性気腹症が知られているが、剖検所見から肺の perivascular sheath からリンパ管を逆行して、腹腔内に空気が移行するという機序も示唆されている。いずれにせよ、これらの報告例は殆どが新生児と老人に限られており、結合織の未発達や変性(老化)が気腹の形成に関与していると推測される。

5 放射線治療後にみられた皮質骨亀裂所見

勝良 剛詞・伊藤 寿介
 林 孝文・小林富貴子
 益子 典子・小山 純市(新潟大学歯学部)
 平 周三・中島 俊一(歯科放射線学講座)

【目的】口腔癌放射線治療患者にみられた皮質骨亀裂所見の意義の考察。

【対象】1993年1月から1998年12月の間に本学放射線科にて放射線治療された頭頸部悪性腫瘍61症例のうち当科にてCTで1年以上経過観察された31症例を対象とした。

【方法】CTにて皮質骨に平行に走行する線状の骨濃度の消失が出現したとき皮質の亀裂ありと定義した。亀裂を認めた症例をCTで亀裂部位、周囲解剖構造との関係、出現前後の周囲の骨変化について評価し、それに臨床的所見として原発部位、照射法、線量、照射から出現までの期間、手術法、放射線骨壊死(以下骨壊死)の有無について検討を加えた。

【結果】放射線治療後に皮質骨亀裂所見のみられたものは8症例であり、原発部位は舌又は口底、術後照射6例、組織内照射が2例、亀裂部位の線量は組織内照射併用例は亀裂部位の線量は不明であったが外照射症例は50 Gyもしくは60 Gyであった。照射から亀裂出現までの期間は6-31ヶ月、平均17.3ヶ月であった。手術侵襲と関連している症例が多かった。亀裂部位はすべて下顎舌側皮質骨の筋付着部位であり、大部分は亀裂出現前に若干の骨硬化像の出現があった。観察期間は短いが亀裂出現後に骨壊死を生じた症例は2例のみであった。

【結論】亀裂出現部位は手術操作された筋の筋付着部が多く照射野内であることから放射線治療後の皮質骨亀裂所見は放射線治療や手術による血

管の障害に起因する皮質骨の低栄養, 低酸素により惹起される骨変化であると推測された. この所見の放射線障害の predictor としての意義について考察する.

6 脊髄ヘルニアの一例

佐藤 晶・渡辺 雅人
野崎 洋明・河内 泉 (新潟大学)
辻 省次 (神経内科)

緩徐進行性の不全型 Brown-Sequard 症候群を呈し MRI が診断に有用であった特発性脊髄ヘルニアの症例を経験したので提示する.

症例は奇形・外傷歴のない53歳男性. 10年間の緩徐進行性の経過で右下肢の感覚異常と左下肢筋力低下を呈し神経内科を受診した. 神経学的には左下肢の MMT 4 レベルの筋力低下と左優位の両下肢深部腱反射亢進と病的反射を認め, 感覚系では右 Th10以下に温痛覚の低下を認めた. 後索症状は認めなかった. 脊髄 MRI では Th 4-5 レベルで脊髄が前方に屈曲・変位し硬膜前方に突出しており, 硬膜内の脊髄は萎縮性に認められた. 脊髄ヘルニアの診断で当院整形外科において Th 3-6 椎弓切除術, 脊髄還納・硬膜修復術を施行したところ症状・神経徴候の軽減を認めた.

従来, 特発性脊髄ヘルニアは極めて稀な疾患とされていたが, 1990 年以降 MRI の普及に伴い症例報告が増加し, これまでに34例が報告されている. 本例においても脊髄 MRI の特徴的な所見により診断に到ることができた. 従来報告例の約 80% が手術により症状の軽減を示しており, 本例でも術後症状の改善を認めたことから, 診断の意義は大きいと考えられる.

II. 特別講演

「新御三家時代の MRI」

新潟大学放射線科

岡本浩一郎

第44回新潟画像医学研究会

日時 平成12年11月18日(土)
午後2時～5時30分
会場 ホテルダイヤモンド新潟
B1F

I. 一般演題

1 経静脈超音波造影剤による心筋コントラストエコー像と心筋シンチグラフィーとの比較の試み

榛沢 和彦・北村 昌也 (新潟大学)
諸 久永・林 純一 (第二外科)
中島 孝・福原 信義 (国立療養所犀潟病院)
神経内科

わが国でも超音波造影剤(レボピスト)の使用が認められ, 様々な領域の超音波検査に応用が始まっている. 特に造影剤を用いた各種臓器の perfusion imaging が注目されており, 心エコーにおいては心筋コントラストエコー法と呼ばれている. 心筋コントラストエコーはこれまで冠動脈に直接気泡等を注入して行っていたが, 超音波造影剤の登場で経静脈投与で行える極めて低侵襲な検査となった. またこれが行えるようになった背景にはエコー機器の発達に拠るところも大きく, 特に壊れやすい気泡を主体とするレボピストの使用では間欠送信によるフラッシュエコー法が不可欠である. 今回我々はレボピストを用いた心筋コントラストエコーを精神, 神経疾患患者で虚血性心疾患が疑われる患者に行い心筋シンチグラフィーとの比較を行った. その結果, パワードップラーを用いたフラッシュエコー法では心室瘤を伴うような明らかな虚血部位でよく一致したが, 軽度の虚血部位では一致しなかった. この原因としては心筋シンチでは細胞レベルの代謝を反映するのに対して心筋コントラストでは微小循環を反映していること, パワードップラーでは blooming を起こし易いことから軽度の病変が分からないことなどが考えられた. そこで現在はパワードップラーを用